

とになる。

二

この第二のタイプに属する作品の共通点は、ひとえに、音楽に熱心に取り組んでいる子どもが登場すること、すなわち、学校で吹奏楽や合唱などの音楽系クラブに属したり、学外で楽器演奏の個人レッスンを受けていたりするような子どもについての話であることだ。その子たちは必ずしも物語の主人公とは限らないが、重要な登場人物としてストーリーの鍵を握ることが多い。より具体的には、彼ら彼女らが音楽活動を通じて何らかの困難に遭遇することが、物語の大きな流れを作ることが多いのである。

たとえば、西村すぐりの『ぼくがバイオリンを弾く理由』（ポプラ社 二〇〇八）でバイオリンリストを目指していた主人公のカイト（小五）は、コンクールに落選してその夢を捨てる。将来プロになるには入賞は不可欠なのに、自分には入賞者のような派手な演奏は絶対にできない、と悟ったからである。だがその決心は口で言うほど潔いものではなく、彼の内心には入賞した練習仲間への嫉妬があった。物語は、彼が同じ年のサッカー少年たちや隣家の老女など、さまざまな人々との交流を通じて、入選にこだわらずに自分の音楽を楽しめるようになるまでを追う。彼がバイオリンの練習を再開する直接のきっかけとなったのは、はから

ずも飛び入り参加した野外コンサートでの合奏だった。

松本祐子の『8分音符のプレリユード』（小峰書店 二〇〇八）にも、一旦あきらめた夢をまた取り戻す子どもが登場する。交通事故の後遺症でピアノが弾けなくなった「天才少女」の透子（中二）。この物語の副主人公である。一方、主人公の果南（中二）は吹奏楽部でフルートを担当しているが、特に熱心な演奏者ではなく、彼女自身の抱える問題はまた別のところにある。物語は、この二人の関わり合いを中心に、事故以来内にもっていた透子が徐々に心を開いていく様を描く。透子は、果南にむりやり吹奏楽部の指導を引き受けさせられて協力するうちに、音楽への愛着を再確認し、作曲の勉強をしにドイツへと旅立って行く。こうして見ると、カイトは小学生の男子で主人公、透子は中学生の女子で副主人公という違いはあっても、「音楽に熱心に取り組んでいる子ども」の描き方という点で、この二作には強い類似性が感じられる。どちらにも当該の子どもへの挫折とそこから立ち直りが描かれることはすでに確認したが、その立ち直りの経緯にも共通する要素は少なくない。カイトも透子も、音楽仲間ではない、普通の子どもたちや大人たちと触れ合う中で音楽の喜びを再発見しているからである。それまで主に独奏を学んでいた二人が、多人数での合奏の中に再出発のきっかけをつかむことも、重要なポイントだろう。